例会佳句

謹賀新年――陰暦では新年が立春を基にしていたので、新年は春であった。明治6年に太陽暦に切り替わったが、当時の習慣がそのまま残り、新春ともいう。一月はまだ寒い。この春は気象上の春でなく、初春（新春）を新年とする考え方が続いている。

若水は新年に初めて汲む水で、初水、福水とも言う。年神様に供えたり、雑煮を作り、お茶を点てたりする。昔は元日の早朝、年男が身なりを改め厳粛な気持ちで、井戸水や湧き水を汲みに行っていたが、現在は水道が普及して若水汲みは楽になった。

正月は雑煮を食べるが、料理法は土地により様々で、関東はのし餅を切った四角い切り餅、西日本は丸餅を食べる。餅を焼く場合とそのまま煮る地方がある。汁は関東は醤油味、関西は味噌仕立てで、京都は白味噌を使う。

正月も終わる頃、小寒が一月六日頃で寒気は日増しに加わり、雪もしばしば降るようになる。大寒が一月二十日頃で、一年で一番寒い時であるが、この日を境に寒さが徐々に緩んでいく。梅の蕾が膨らんだり、日差しの暖かさが増したりと、人々の胸には春遠からじの希望が湧くようになる。

（四季の会　世話人）

（ゴシックの俳句は会員互選の上位句）

散り去りて又すぐ戻る稲雀
朝霧や墨絵ぼかしの阿夫利嶺
新米の小袋並ぶ道の駅
神奈川　中本萬里

少年のつま先立やぶどう狩り
松島や抹茶一服秋茜
辿り着く山頂の小屋霧ふかし
東京　坂本秀浩

オカリナの澄んだ音色や霧ふかし
霊峰をちらりと見せて葡萄棚
河童らの水切り遊び夏休み
千葉　加藤浩雲

船長は子に譲りたる夜焚船
語部の賢治の詩や流れ星
弁当の隅に二粒黒葡萄
宮城　鈴木わかば

霧ごめや鋼色なる日本海
白萩のあたり最も暮れ泥む
むかし蔵此処にありけり柿熟るる
大阪　加藤あや

初葡萄種子無きか歯を止めにけり
八朔や一刺しの蚊の意地観たり
秋時雨通院慣れし老夫婦
東京　北詰南風

一湾をすっぽりつつむ星月夜
かぶりつく西瓜に子等の野生あり
すっぽりと七堂伽藍霧ふかし
兵庫　高森功一

コーラより抹茶を選りし終戦忌
葡萄食む四捨五入して十粒ほど
きりたんぽ男鹿くんだりへ足伸ばす
千葉　安彦緑泉

榛名山霧に向ひてショット打つ
葡萄酒のルージュグラスを彩れり
松茸や値札と香比べけり
東京　坂本州賢

久々の大穴的中天高し
夜汽車行く煙残して月清し
伏兵や川中島は霧の中
東京　中西麦人

秋扇落語の仕草まねてみる
椋鳥の群れる大樹や駅近し
馬子唄を唸りし翁里の秋
千葉　門脇耕水

白檀の香り残して秋扇
虫の音や文机といふよりどころ
虫の声とぎれては鳴き夜を澄す
神奈川　森京子

水道・下水道人の俳句の会　「四季の会」入会歓迎

申込先　〒102-0074　東京都千代田区九段南4－8－9
日本水道会館内　日本水道新聞社気付
「四季の会」世話係　まで